雨空（一幕）

久保田万太郎

この脚本は、装置に対して具体的な指定や要求がされておらない。従つて装置をする者は独断で設計するというようなことでなしに、演出をする者とよく打合せをして、疑問を残さないように作るべきであると思う。しかし、脚本をよく読み返えしながら考えて行けば、人物の動きや会話のなかゝら、間取りや建具などが段々判然と浮かんで来る。そして、 最も大切なことは、そうしたなかゝら、大正の頃の浅草辺のしもたやの雰囲気を捉えることである。装置図について言えば、上手の障子が台所に通じ、窓にはよし戸を立て、小壁は書割の嵌め込みのタンスと押入れ、棲を距だてゝ下手障子の奥に玄関の格子、という構成にしてみた。 この場合は玄関を覗かせてあるが舞台條件が許せば、下手の障子は押入れの襖にして、下手、唐紙を距だてゝ一間おいて玄関へ通じる気持にした方が、もつと情調がにじみ出てくると思う。ホリゾントは照明を工夫して夏の夜の雨もようの感じを出すようにする。

【人物】

おせい　母親（登場せず）

おきく　お末の姉（すでに他家へ縁付きたるもの。――二十四五）

お末　おきくの妹（二十二三）

幸三　指物職人（二十七八）

長平　浅草の芝居に出てゐる古ゐ書生役者（四十四五）

使の男

浅草山の宿あたりのところ、大通りよりすこし離れた新みち。おせい母子の住居。八月上旬の曇つて暗き宵。八時ごろ。おせいの留守で、二三日身体の工合を惡くしたお末が、床の上のすわり、三味線を出して、思ひつくまゝのものをそゞろ弾いてゐる。それにはかゝはりなく、長平は、壁に凭りかゝり、新聞の拾ひ読みをしてゐる。――雨もよひの、蚊やりの匂が澱んで、時おり冷めたい、水のやうな風がどこからともなく忍び込んで来る。――よきところに影燈籠のかげが寂しい。お末、上方唄の「菊の露」を弾く。

――間――

長平　（ふと顔をあげて）其奴、聴いたやうな三味線だな。（ごそくさいながら憎げのない言葉づかひ）

お末　（弾きながら）これ。

長平　あゝ。

お末　鳥の声鐘の響さへ身にしみて。――「菊の露」よ。

長平　鳥の声鐘の音さへ身にしみて。――あゝさうか、三味線出してよい機嫌ぢやなつて奴だな。

お末　思ひ出すほど泪がさきに、落ちてながるゝ、妹背の川に。――あたしの好きな唄。

長平　これで、何だからね、沢市をやつたこともあるんだからね。

お末　（笑つて）定（きま）りいつてる。――あんたにいはせると、なんの芝居でもやらないものはないんだから。（三味線を下に置く）

長平　だつて眞実（ほんと）だから仕様がない。

お末　でも、こなひだはこなひだで女形――袖萩をしたことがあるつていつたぢやないの。

長平　それはずつと前の話だ。――生国は越後の新発田で洒落に芝居をしてゐる時分のこつた。（新聞を手から離す）――沢市をやつたのは、その、もう、ずつとあと、大したこれが役者になつて九州をあるいてゐるときだ。――忘れもしない、十一月の末、空つ風の颼々（ぴゅうぴゅう）ふくさなかに大御難（おほごなん）を喰つてね――命からがら飛びこんだのが岩井なにがしといふ女役者の一座さ。――壮士の方ではと首を傾げやがつたから、今でこそ、こんな、尾羽うち枯らしの、書生役者の仲間には入つてゐるが、恥をいへば、これでも、堀越の旦那の呼吸（いき）のかゝつたことのある身体（からだ）だ――足のうらにはまだ檜の匂が残つてゐるんだ。――かう、まあ、いつたもんだ。

お末　でたらめねえ。

長平　とね、どう思つたか、おみそれ申しまして相済みません、ではどうぞといふことになつて、のつけに、此奴、あてがはれたものが――何だと思ふ――大宅の太郎は目を覚しつてしろものだ。

お末　（笑つて）まあ。

長平　さすがにすこし驚いたね。――ぎり〳〵結着、決して、もう、おかけ値のないところが、昨日まで、「己の罪」のモリソン、「通夜物語」の平助。乃至は「金色夜叉」の、仕出しに出る孤児院の先生をやらしたら、当時、どこにも眞似手があるまいといはれた奴が、それ覚えてか君さまの、袴も春の朧染。――おぼろげならぬ殿ぶりを。――幾らなんでも、此奴、莫迦でねえから気がさゝあね。

お末　（笑。無言）

長平　だが、背に腹はかへられない。苦しくなればぬすつとでもする奴がある。――さう思つて肚を定めた。――こゝを先途と思ひきり白く塗つたね。

お末　でも、舞台へ出たの。

長平　出たともさ。――何でも構はねえ、高飛車に出ればいゝと思つたから、ふんだんに此奴が眼を剥いてみせたね。――いかさま切なるおことが心底、さほどに思ふ愛情をつてなことで、大した芝居を御覧に入れたのさ。

お末　お客こそ災難ね。

長平　ところが可笑しいや。――客はグッともいはねえ。

お末　（笑つて）あきれたんだわ。

長平　そんなんぢやねえ。――幕が閉つて、楽屋へ入ると、楽屋の奴らの扱ひがまづ違つたね。――親方々々つていやあがる。

お末　眞逆。

長平　いゝえ眞実。――眞実だよ。――それが証拠には、それなり、此方はほんの腰かけのつもりだつたのを是非といはれて、ずる〳〵に、一年あまりその芝居にゐついちまつたさ。

お末　（無言）

長平　その一年あまり。――その間に随分いろんなものをやつた。光国のあとが、忘れもしない、白石噺の大黒屋惣六、そのあとが輝虎配膳の輝虎さ、――日本駄右衛門もやれば、蝙蝠安もやつた、――源藏もやれば、孫右衛門もやつた。――一度なんかは是非やつてくれといはれて俊寛をやつたがね。――此奴にはてこずつた。幾ら器用でも、器用ばかりぢやあ此奴はこなせなかつた。

お末　よつぽど役者のゐない芝居なのね。

長平　ゐるにもゐないにも、どうにか恰好のついてるのは、座頭と、座頭の義理ある妹になつてる奴と、もう一人、敵役をやる婆さんと、それつきりだつた。あとは、もう、源氏ぶしつてもないがらくたの寄合。――なかへ入つてみて驚いたよ。

お末　その座頭つていふのは幾つぐらゐなの。

長平　さう。――その時分で二十八九。三十にはならなかつた。

お末　若いのねえ。

長平　若いんだ。――それには縹緻がよかつた。――米花の弟子でね、しばらく三崎座にゐたこ

ともあつたさうだが、なか〳〵、それは、しつかりした技倆(うで)をもつてた。――わけても世話がかつたものが巧かつた。

お末　そんな人が、また、どうして田舎なんかに――。

長平　さ、さ、さ、そこだ。――好(す)いた男にわしや命でも、なんの惜しから露の身のさ。

お末　御亭主があるの。

長平　もとは、何か、三味線弾きかなんかだつたらしい。――東京の人間だ。――三崎座にゐるときでもいゝ仲になつて、そのまゝ、ずる〳〵に、つまりは旅にでも出たんだらう。――一しよにね。

お末　（うなづく――無言）

長平　三十七八の、みたところはあんまりドッとしねえ男だつたが、女は惚れてた。どうしてあんなにも惚れたものだらうと思はれるほど惚れてた。――煩ひでもしようものなら、それこそ、夜の目もねずに世話をした。――それも、昼間、芝居で散々身体をつかつたあげくだからね。

お末　まあ。――それで御亭主は。

長平　亭主のはうだつて、それは、思へば思はるゝさ。――それほどにされゝばいかな亭主だつてまんざら邪慳にはしねえだらう。――まして、その女のために、女房子まで捨てゝかゝつたのなら、此奴。――

お末　その人、ほかに、おかみさんがあつたの。
長平　専らさういふうはさだつた。――あんまりあてにはならないがね。
お末　だけど――だけどいゝわね。
長平　何が。
お末　苦労したつて――好きな人と一しよに苦労するなら仕栄（しばえ）があるわ。（笑つてみせる）
長平　おつと、と、と。――あと二三日で結納をする人だよ。
お末　どうして。（顔をすこし染める）
長平　穏ならねえことをいふ。――そんなことをいふと、さも、外に何かあつて、今度の縁談（はなし）が気にでも入らねえやうにみえるぜ。
お末　さうなんだもの。
長平　（笑つて）きいた風なことをいふぜ。――そんな器用なことの出来るお末ちゃんなら何にも心配はねえとさ。
お末　（笑つて）はゞかりさま。
長平　だつてさうぢやあないか。（いひかけて、ふと、表の格子のあいたのを聞きつける）誰か来たやうだぜ。
お末　さう。（耳を傾ける）
長平　誰だらう。

お末　おつ母さんぢやあないかしら。
長平　幾ら、なんでも、まだ帰つて来やしないだらう。

長平が立つて唐紙をあける。途端に、外から、おきくが入つて来る。

おきく　今晩は。
長平　何だ、諏訪町の御新造か。
おきく　（お末の床のうへにゐるのをみて）あら、どうしたの。
お末　入らつしやい。

長平、蒲団をそこへ出す。

おきく　どこか悪いの。（重ねてさういひながらすわる）
お末　暑さにでもあたつたんでせう、二三日、なんだか脳（あたま）が重くつて。
おきく　それはいけないね。
お末　いゝえ、そんな、大したことはないんですよ。
おきく　でも、今月になつて、悪くあつかつたり冷（すゝ）しかつたり――なんだか陽気がハッキリしない

から。（なかば長平にかけていふ）

長平　ふるなら降るで、いつそ。ざあつと一杯来てしまへばいゝんだが。――なんだかふんぎり、がつかねえもんだから。

おきく　うちでもね、台所の女中が、これは脚気だけれど、この間つから矢張工合が悪くつね。

お末　まあ。――それぢやあたいへんでせう。

おきく　大勢手があるからいゝやうなものだけれど、でも、なんだか、ごた〳〵片附かないやうな気がしてね。

お末　さうでせうつて。

おきく　だもんだから、来よう〳〵と思ひながら、つい、何してしまつて。――今日は、いま、急に用が出来て、山谷まで来たから、つひでに、ちやうどいゝから一寸寄つてみたの。

お末　いゝえね、お母さんも、姉さんに相談することがあるから、一度行く〳〵といつてながらいろ〳〵人が来たりなんかして。――そのうちに、こんな、あたしが寝るやうになつてしまつたもんですから。

おきく　（そこらをみ廻すやうなこゝろで）それで今夜は？

お末　おつ母さん？

おきく　あゝ。（うなづく）

お末　何ですか、昼間、使の人が来て、燈火（あかり）のつきぎはに末広町へ行きました。

おきく　末広町へ。――あゝさう。

長平　さうとは知らず、此奴が、通りがかりにふら〳〵と寄つたのが身のつまり。――いゝところへ来た、長さん、病人一人だからすこしゐてやつておくれ。――たちまち留守居仰せつかりさ。

おきく　だけど芝居は。――おやすみなの。

長平　楽屋に一寸ごた〳〵があつてね。疾うに出るはずの初日がまだ出ない。

おきく　よくごた〳〵する芝居ね。

長平　まあ長え正月はないだらうね。――ところでお客さまにお茶をあげるんだが。

お末　そのお茶はもう出ないかも知れない。――長さん、済まないけれど、いれ替へて頂戴。

長平猪牙がかりに立たうとする。

おきく　あゝ、もう、わたしなら沢山。――山谷で、いま、散々飲んで来たんだから。

お末　でも。

おきく　いゝのよ。――長さん、ほんとにいゝのよ。――（笑つて）自分のうちへ来て遠慮しやしないわよ。

長平　では、まあ、御随意に。――そのはうが此方も立たなくつてすむ。（立ちかけたのをまた

すわる）

お末　あゝ、さうだ。――お茶なんかよりもいゝものがあつた。――長さん、やつぱり立つて。

長平　なぜ。

お末　台所の、鼠入らずの上の棚にいゝものがあるから持つて来て。

長平　鼠入らずの上の棚。――ハテ何だらう。

お末　あんたにもお相伴させるわよ。

長平、立つて台所のはうへ行く。

おきく　なあに。

お末　姉さんの好きなもの。

おきく　好きなもの。――何だらう。

お末　好きでも、でも、今年はいつものやうに食べられないでせう。

――間――

長平、二つに割つた西瓜を盆の上にのせて、庖丁を添へて持つて出る。

長平　持つて来たぜ、持つて来たぜ。

おきく　（みて）あゝ西瓜。

お末　めづらしいでせう。

おきく　あんまり縁がないわね。

長平　こんな乙なものを、どうして、世間の奴らは安くあつかふんだらう。（盆をおきくの前に置く）

おきく　さういふわけでもないんだらうけれど、年寄のあるうちだと、やつぱり大事をとるからね。

お末　長さん、つけるものを持つて来て。

長平　あゝさうだ。――忘れた。（立つて、また、台所へ行く）

お末　姉さん、どう。――あがらない。

おきく　有難う。――御馳走になるわ。（庖丁をとり上げる）お前さんは伺う。

お末　あたし。――あたしは結構。

おきく、西瓜を切りにかゝる。――長平、小皿に塩をいれて持つてくる。

――間――

二人食べにかゝる。

長平　（噛（かぢ）つて）うむ、此奴はうめえや。

おきく　（簪の脚で種をとりながら）いゝ西瓜ね。

お末　だけど、それ、うまいことはうまくつても食べるのが大へんでね。

長平　それは仕方がない。――此奴は、かうやつて、みえもかざりもなく、かぶりついて喰ふところがいゝんだ。――さうして、かう、一々種を吐（は）き出すんだ。

おきく　わたしたちは、まさか、さうも出来ないけれど。

お末　でも、姉さんでも、以前（せん）には。――よく、それで、幸さんにいはれたぢやありませんか。

おきく　だつて、お前、それは。――（笑つて）年のゆかない時分は。

お末　いゝえ、さうでもなかつたわ。――いつだつたか、あれ、瓦町のお師匠さんが来て、おつ母さんとしきりに話をしてゐる間、台所で、ちやうど八百由の持つて来た西瓜を、姉さんと二人でこつそり内職してゐるとき、幸さんが来て、そのときも、姉さん、いはれたぢやありませんか。

おきく　（軽く）さうだつたかね。

お末　あれが、ちやうど、千原屋さんからはじめて姉さんに縁話（はなし）があつたとき。――だから、あたし、覚えてる。

おきく　さうだつたかしら。

お末　えゝ、さうよ。

長平　さういへば何だつていふぢやあないか。――幸さんは大阪へ行くんだつていふぢやあないか。

お末　えゝ。――誰に聞いて。

長平　此間、こゝのうちで聞いた。

お末　あゝさう。

おきく　（ふと思ひがけないやうに）そんなことがあるの。

お末　えゝ。――姉さんにまだいはなかつたかしら。

おきく　いゝえ、聞かない。――どういふの。

お末　どういふつて。――上方へ行くことになつたのよ。

おきく　何時。

お末　近いうちに。

おきく　あの遠くへ出ることの嫌ひな人が、よく、ま、出かける気になつたわね。――叔父さんとでも一しょ。

お末　いゝえ、姉さん。――一人よ。

おきく　一人。

お末　上方へ行つて。――ずつと、もう、行つたつきりになるのよ。

おきく　すぐにかへつて来るんぢやあないの。

お末　早くつて三年。――悪くすると、十年ぐらゐ、もう、かへつて来ないかも知れないんですつて。

おきく　どうして。（手に持つたものをしづかに下に置く）

お末　あつちへ行つて仕事をするんですつて。

おきく　あつちへ行つて仕事を。――だつて可笑しいぢやあないか。

お末　えゝ。――可笑しいと思ふんですけれど。

長平　全体、幸さんといふ人は、箱常の、行く〳〵は親方のあとに直るはずの人。――此方（こち）とらはさう思つてたがね。

おきく　世間では、みんな、さういふやうに思つてるけれど、べつにさういふわけでもなくつて。――ことによると、箱常の、叔父さんのはうにはさういふつもりもあるかも知れないけれど、それにしても、幸さんは、どのみち、自分のうちを立てなければならない身体だから。

長平　はてね。

おきく　さうとしても、あの人が、東京を離れるつてことはない。

お末　これが二三年まへなら、また、叔母さんとの折合がいけないといふこともあつたけれど、このごろでは、もう、叔母さんはゐないし、叔父さんと二人のほんとの水入らず。――ほ

かのお弟子たちは、お弟子たちで、幸さん〳〵とあの通り、皆懐(みんなな)いてゐるし。――なんにも不足なことはないと思ふんですけれど。

長平　芒尾花はなけれども、世を忍び路の旅衣。――大きにそんな意気なことでもあるんぢやないか。

お末　いゝえ、幸さんにかぎつて、そんなことはないわ。

長平　でも、このごろは、あんまりさうでもないらしいぜ。

お末　いゝえ、それは、お酒は飲むけれど。――たゞお酒を飲むだけよ。

おきく　（笑って）駄目よ、長さん。――この人は幸さんが贔屓なんだから。

お末　あら。――さういふわけぢやあないけれど。

長平　其奴は、ま、戯談だが。――だが知らない奴はさう思ふぜ。

おきく　（間）だけど、また、それを、叔父さんがよく承知したね。

お末　それが叔父さんは割合に平気で。――幸の奴は、このごろ、調子がすこし狂つてる。――なんの、彼奴が、旅へでて辛抱が出来るものか。――半月たゝないうちにかへつて来ることは分つてる。――さういつて、この間も、うちのおつ母さんと話してゐましたわ。

長平　（笑つて）多寡をくゝつてるのはいゝや。

おきく　（眉をひそめるやうに）そんなことをいつて。――半月たつてかへつて来なかつたら何うするだらう。

お末　かへつて来やしませんわ。――あの幸さんが、どうして、かへつて来るもんですか。――自分で育てながら、叔父さんに、幸さんのあの強情が分らないんでせうか。

長平　形は大きくても、まだ、頑是はござりませぬさ。――親方の眼からみたら、幸さんだつて。

お末　だつて、長さん。

おきく　いゝえ、それはさうかも知れない。――うちのおつ母さんにしたつてさうだもの。

お末　さういへばさうだけれど。

長平　（述懐するものゝやうに）だが、お末ちやんは嫁に行く、幸さんはゐなくなる。――ちよいと、此奴、こつちも当分さびしくなる。

――間――

三人とも、ふと、口をつぐむ。――雨を含んだ風がながれるやうに入つて来る。

おきく　（襟を掻き合せるやうにして）冷しいこと。

長平　明日はいよ〳〵降りか。

おきく　この風の工合ぢやあね。――（心づいたやうに）それはさうと、もう、何時だらう。

長平　さあ。――もう、そろ〳〵、九時だらう。

お末　（時計をみる）九時――七分前よ。
おきく　大へんだ。――わたしはかへらなければ。
お末　まだ、いゝでせう。――そのうちには、もう、おつ母さんもかへつて来ますわ。
おきく　でも、今夜は、九時までにかへるつもりにして来たから。――うちへかへつて、まだ、いろ〳〵用がある。
お末　大へんね。――でも俥でせう。
おきく　俥。
長平　なら、一つ飛だ。
おきく　でも、かへるわ。――明日。――明日は来られない。――明日は来られないけれど、二三日うちに、また、出直して来るわ。
お末　さう。
おきく　今夜は、たゞ、その後あのはうが何うなつたかと思つてね。
お末　あゝさう。――いろ〳〵どうも。（頭を下げるやうな心もち）
おきく　で、結納は。――何日にきまつて。
お末　六日とかいつてました。
おきく　六日。――（繰つてみて）明々後日ね。
お末　今夜、末広町は、そのことなんでせう。

おきく　さうだらう。――（気をかへて）ぢやあ左様なら。――御馳走さま。（立ちあがる）

お末　さうですか。

おきく　あ、それから、大切になさいよ。

お末　えゝ有難う。――もう大丈夫。――明日は起きます。

おきく　軽はずみをしないはうがいゝわ。

長平　大切な身体だ。

おきく　さうよ、ほんとに大切な身体だから。

お末　えゝ。

おきく　ぢやあ、長さん、左様なら。

長平　どうも、まことに。（立ちあがる）

おきく　（どこかで虫のないてゐるのが聞える）よくないてるわね。――うちの？

お末　いゝえ、裏の家の。

おきく　あら、さう。

おきく、そのまゝ、出て行く。――お末も、長平も、あとから送つて出て行く。

やゝ長き間。――虫の音が誰もゐない舞台のうへに澄む。

台所のはうへの通ひ路の障子があく。幸三が入つて来る。すこし酔つてゐる。――悩ましげ

に柱に凭る。
お末をさきに、長平、座敷にかへつて来る。

お末　（幸三のゐるのをみて）あら。
長平　何だ。――何時来たんだ。
幸三　今しがた。（笑ふ。――悩ましさが隠れる）
お末　ちつとも知らなかつたわ。
幸三　表へまはるのが面倒だから裏から入つて来た。――どうだね、今日はすこしはいゝかね。
お末　えゝ有難う。――今日は、もう、すつかり。――今夜は顔のいろがいゝでせう。
幸三　うむ、どうにか人間らしいや。――おつ母さんはまだ帰らないかい。
お末　よく知つてるわね。
幸三　知つてるさ。――神田へ行くといつて、先刻、店のまへを通つた。
お末　何とかいつて？
幸三　長さんが留守をしてゐるから行つてみろ。さうゐつてつた。
長平　そんなら早く来てくれゝばいゝのに。
幸三　なによ、そのつもりで外へ出たところ、途中で、ちよいと、新公のところへ引つかゝつたもんだから。――一とくち附合つたんで遅くなつた。

お末　そんなことをしてるんですもの。――だから、先刻、評判がわるかつたわ。

幸三　誰に。

お末　姉さんに。

幸三　（ふと無言）

長平　今夜は、いまゝで、お菊さんが来てゐたんだ。

幸三　さうかい。

お末　ほんとの入れちがひ。――もう一足だつたよ。――（長平に）ねえ。

長平　さう。――表から来たら角（かど）ぐらゐでぶつかつたらう。

幸三　そんな評判の悪いところなんかへ飛込まなくつて仕合だつた。――長さん、どうだ、こなひだの仇をうたれてやらうか。

長平　討たるゝこゝろであらうがな。――よし、やらう。

長平、立つて、将棋の盤を持つて来る。幸三のまへに置く。

――間――

格子があいて表へ誰か来る。――お末が聞きつける。

お末　誰か来たやうよ。

長平　（駒をならべながら）おつ母さんだらう。
お末　さうぢやないらしい。――何かいつてゝよ。
長平　何かいつてる。――其奴はないだらう。――（大きな声で）何誰（どなた）。

長平、いひながら立つて行く。――ぢきに手紙を持つてかへつて来る。

お末　誰。
長平　使が俺んところへ手紙を持つて来たんだ。（立つたまゝ封を切つて読む）
お末　どこから来たの。
長平　芝居の奴からだ。（さういひながら、返事をしに表のはうへ行き、すぐに、また、かへつて来る）――ちよいと、俺は、清川まで行つて来るぜ。
お末　どうしたの。――用でも出来たの。
長平　四五人で何か寄合をつけてる。――相談があるから直ぐに来いつていふんだ。
お末　でも、よく、こゝにゐるのが分つたわね。
長平　方々探したらしいや。――どこを探してもゐないんで、とゞのつまり、こゝへ来たんだらう。
幸三　手数をかけさせる。――大した流行（はやり）つ奴（こ）だ。

長平　（笑つて）中貰ひで一寸行つて来るぜ。

お末　留守番だから早く帰つて来なければ駄目よ。

長平　それは後釜が出来たから安心だ。

お末　あら、それはいけないわ。

長平　紛紜（ごたつき）をいゝことに飲んでるんだ。――なに、すぐにかへつて来るよ。

幸三　危（あぶね）えもんだ。

長平　大丈夫。――きつと、すぐ、かへつて来る。――かへつて来てその勝負をつける。――首を洗うて義家お待ちやれだ。

長平、笑つて、そのまゝ出て行く。

――間――

二人とも、ふと、無言。――あたりが継穂のないやうに白ける。――幸三、何といふこともなく、盤の上の駒をうごかす。

――間――

お末、床のうへを離れて、茶箪笥のそばに寄る。茶を淹れにかゝる。

幸三　（みて）何だい、茶を淹れるのか。

お末　えゝ。

幸三　俺ならいゝぜ。

お末　えゝ。――でも、もう、出ないから。

幸三　そんなら俺は水のはうがいゝや。

お末　さう。――ぢやあお冷（ひや）にしませう。（立ちかける）

幸三　だけど、いゝぜ。――病人が、そんな、仂かなくつたつて。

お末　大丈夫よ。――あしたは、もう、起きるつもり。

お末、台所へ行き、大きな湯呑に水を満たして持つて来る。――幸三のそばに置いて床のうへにかへる。

（このあたり、すべて、たとへば兄に仕える妹のうそのなき心もち。――それに対して、幸三にも、妹をみる兄の厚きいたはりあること。）

幸三　（水をのみ干す。――湯呑を持つたまゝ）あゝうまかつた。

お末　もう一つ上げませうか。

幸三　もう沢山だ。

お末　さう。――どうぞ御遠慮なく。（笑ふ）

幸三　（湯呑をみて）この湯呑も古い湯呑だな。

お末　覚えてゝ。

幸三　覚えてるとも。――此奴で、始終、こゝの死んだお父つあんが熱い奴を引つかけてゐたんだ。

お末　さうよ。――朝、仕事に行くときと、晩、かへつて来てからと。――仕事に行かないときにはお昼にも飲んだわ。

幸三　でも、まるで、酔つたところを此方とらにみせたことがなかつた。――いつも機嫌のいゝ顔をしてゐたね。

お末　えゝ。――わたし、こんなだけれど、お父つあんのことだけは、今でも、ときゞ思ひ出しますわ。

幸三　もう少し生かして置きたかつた。

お末　せめて去年ぐらゐまで。――去年まで生きてたつて、まだ、六十にはなりませんでしたわ。

幸三　ならないとも。――やうやく五十八。――うちの叔父貴より三つ下だ。

お末　（間）お父つあんさへゐたら、姉さんだつて、あんな――あんなお金のあるところへなんか行かなくつたつて好かつたんですわ。

幸三　（無言）

お末　大工の娘が仕合せだといふけれど。――仕合せのやうで不仕合せですわ。

幸三　（話をわきに外らすやうに）どつちだつていゝやな、そんなこと。――そんなことよりもこの盤だ。――此奴も古い馴染だぜ。（将棋の盤のうへに手を置く）

お末　さうね。――詰将棋だの、はさみ将棋だの。――姉さんには出来てもあたしには出来なくつて。莫迦でしたわね、あたし。――焼餅をやいて、よく、お母さんに叱られましたわ。

幸三　その代りには、どゝろぼう将棋にかけると誰よりも巧かつたからいゝぢやないか。

お末　（笑つて）さうでしたわね。

幸三　一つ、趣向をかへて、俺は将棋盤でも持ちこむかな。

お末　どうして。

幸三　これだつて、お前（めえ）、莫迦には出来ねえ。世帯道具だぜ。

お末　あら。――それぢやあ約束がちがふわ。

幸三　なぜ。

お末　だつて、あたしがお嫁に行くときには、針箱は俺が拵へてやるつて以前（せん）からいつてたぢやありませんか。

幸三　さうだつたかな。

お末　忘れたの。

幸三　忘れた。

お末　ほんたう？

幸三　（笑つて）嘘だよ。――大丈夫だ。――忘れやしねえ。

お末　よかつた。

幸三　入手にはかけねえよ。針一つだつて俺が削るんだ。

お末　あたし、大切（だんじ）にしますわ。（寂しい響をもつ）

幸三　それが出来るまで。――それが出来たときに俺は東京をおさらばだ。

お末　ぢやあ幸さんは。――あたしがお嫁に行くところをみて呉れないんですか。

幸三　それがみられる位なら心配はしねえよ。（寂しく笑ふ）

お末　幸さん。

幸三　え。

お末　（間）かんにんして下さいな。（急に泣き頽れる）

幸三　どうしたんだ。――えゝ。――どうしたんだ。（お末のそばへ寄る）

お末　あたしねえ、幸さん。――あたし。――あたしが今度。――今度、どうして、急に、お嫁になんか行くことになつたのか幸さんに分りますか。

幸三　何をいつてるんだな。

お末　あたしねえ。――あたし。――あたし姉さんがうらやましい。

幸三　（無言）

お末　幸さんは、まだ、姉さんのことを忘れないでせう。

幸三　何をいつてるんだな。――そんな莫迦なことがあるものか。

お末　いゝえ。――いゝえ、駄目。――外の人は何ていつたつて、――あたしには。――あたしには分りますわ。

幸三　（無言）

お末　姉さんが、去年、千原屋へ行つてから。――姉さんにあはないやうに〳〵とあなたがしてゐることも。――それもあたしは知つてます。――今夜でも、姉さんが来ていたんで、それで、わざと、裏から入つて来て（ふと幸三と顔を合せる）――いゝえ、――あたしはすぐにさうだと思ひましたわ。

幸三　（無言）

お末　姉さんが千原屋へ行くとき。――何も、みんな、うちのためだとは思つても、――さう思つても、あたしは、姉さんを憎いと思ひましたわ。幸さんの心もちも知つてるくせに。――幸さんを一人残して。――姉さんもあんまりだと思ひました。――さう思ふと、あなたの、お店にゐても、どこにゐても、とき〳〵、黙つて、ぢつと、下を向いてゐるやうなところが見えるやうな――ひとりで眼のなかが濡れて来ました。

幸三　（無言）

お末　そのうちに、だん〳〵、夕方なんか窓から表をみてゐると、いつのまにか、心が、かう、遠くのはうをみてゐるやうな、――あなたのそばへ行つてますの。――板を削つたり、切

つたりしてゐるそばに附いて仂いてるのが、姉さんのやうな、あたしのやうな。――気がついて、幾度、はつと思つたか知れません。

幸三　（無言）

お末　嘘だ、そんなことは嘘だ。――自分で一生けん命にさう思ひました。――でも、さうすればするほど、あとから〳〵とまた色んなことが出て来て、何がなんだか、余計、もう、分らなくなりました。――そのとき、これがもし幸さんのはうに知れたら。――ふつとさう思ひました。――あたし、呼吸（いき）がとまるかと思ひました。

幸三　（無言）

お末　妹のやうに――眞実（ほんたう）の妹のやうに思つてゝ呉れるのに、そんな、――そんな間違つたことを考へて、莫迦な奴だと嗤はれたら。――わらはれるなら、まだようございます。そんな奴ならもう構はない。――もしかさうでもいはれたら。――あたし、もう、死んだつて間に合ひませんわ。

幸三　分つた。――何にも、もう、いはなくつてもいゝ。（泪ながれる。）

お末　かんにんして下さい。（再び泣きくづれる）

幸三　（闇）俺は姉さんが好きだつた。――約束もした。――だが、そんな約束なんか反古みたやうなものだと思つて断念（あきら）めやうとした。――だけど、駄目だ。――断念（あきら）められねえ。――たゞ、お末ちゃん、お前（めえ）か、――お前が優しくして呉れるので立つ瀬が出来た。――俺は、

改めて、お前に、礼をいふぜ。

お末　（無言。――泣いてゐる）

幸三　その当座、柄にもねえ自棄（やけ）をして、酒も飲んだ、遊びにも行つた。――だが、酒を飲んでも、遊びに行つても、俺は深みへ嵌らなかつた。――お前つてものゝゐることを思ふと、――お前つてものが深切にしてくれることを思ふと、酒を飲む空（そら）もなければ、遊びに行く空もなかつた。――そんなことをしちやあお前に済まないやうな気がした。――俺はお前にすまねへと思つた。

お末　（無言）

幸三　疳に障ることのあつたときでも、根性のヒン曲つたときでも、お前の顔をみると、すぐ、量見が素直になつた。――俺には親もなければ同胞（ぎやうだい）もない。――お前つてものが出来て俺ははじめて生甲斐が出来たんだ。

お末　幸さん。

幸三　すると、お前、今度の縁談だ。

お末　（無言）

幸三　話が定つたと聞いたとき、俺は、今までついてた燈火（あかり）を急にふつ消されでもしたやうな気がした。――俺はつくゞ〳〵世の中が嫌になつた。

お末　（無言――泣く）

幸三　俺は、もう、東京にゐる空はなくなつた。――みす〳〵お前のゐなくなるのを誰がみてゐられる。――俺が上方へ行くといひ出したのも無理はねえだらう。

お末　幸さん。

幸三　何だな。

お末　あたし……

幸三　もういゝや。――よして呉れ。

台所のはうの障子があく。――外からかへつて来た長平が「おわかれだ、おわかれだ」。といひながら入つて来る。意識のあんまりハッキリしないくらいに醉つてゐる。

長平　（笑つて）おわかれだ。――さ、幸の字、おわかれに一杯飲まう。（幸三のそばにすはる）

お末急いで泣顔をかくす

幸三　どうしたんだ。長さん。――何をいつてるんだ。

長平　（笑つて）何がつて、お前、可笑しいや。――急におわかれになつたんだから可笑しいや。――明日高崎へ乗打（のりうち）でえ。

幸三　何だ、旅へ行くのか。

長平　下らねえことにごつた返してゐるところなんか眞つ平だ。――東京ばかり日は照らねえ。――久しぶりで、また、旅烏だ。

お末　まあ、長さん。

長平　（笑つて）お末坊は嫁に行く。――幸ちゃんは上方へ行く。――そこで俺も旅烏よ。これで怨つこがなくなつたのよ。

幸三　ぢきに――ぢきに帰（けえ）るんだらう。

長平　誰が帰（けえ）つて来るものか。――だからもう当分あへねえんだ。――一年たつて逢はれるか、二年たつてあはれるか、みとめのつかねえ旅の空だ。――さ、だから行かう。――だから一杯飲みに行かう。（幸三の手をとつて立ちかける）

幸三　（長平の浴衣の濡れてゐるのをみて）何だ、濡れてるぢやあねえか。――降つて来たのか。

長平　降つて来た。――降つて来たつて構はねえ。――行かう。さ、行かう。（幸三の手をとつて引立てる）

幸三　うむ、行かう。――（お末に）もうおつ母さんもかへつて来るだらう。――俺はもう帰（けえ）るよ。

お味　（力なく）えゝ。

幸三　（間）さ、行かう。

長平　行かう。

二人行きかける。

――間――

お末　幸さん。（呼ぶ）

幸三　（わざと何のことのないやうに）何だ、末ちゃん。（お末のはうをみる）

――間――

雨の降る音強く聞えはじめる。

――幕――

底本

脚本シリーズ　第４集

著者：文部省青少年演劇研究会　編

出版者：教育弘報社

出版年月日：１９５４　２版